

教育の広がり（寺子屋）



教科書文庫 安政-22と江戸-8の「商売往来」

解説

「商売往来」はいわゆる往来物（初等教育の教科書）の一つです。商取引に関する知識や教養、広範な商品語彙のほか、勤勉・節儉・正直等の心得を強調していることから、商人のみならず一般庶民の日常生活にも役だつ教科書となり、江戸時代後期・幕末期にかけて庶民の家庭や寺子屋で広く学ばれ、数多くの類書を生みました。当館にも、30冊以上の商売往来があります。

寺子屋の様子については、幕末から明治のはじめに大島郡の寺子屋で学んだ同郡志佐の近藤慶一（のち県議会議長、衆議院議員、大島銀行頭取などを歴任）の『近藤慶一翁自伝』がよく伝えています。氏は1864（元治元）年に5歳で永寿庵の等悟和尚に入門し、実語教・童子教・孝経・大学・中庸・孟子等を学び、また習字として、いろは・仮名・村名附・商業往来・諸職往来・風月往来・庭訓往来等を習い、算術も八算（割り算九九）や乗法等を学びました。授業の形態や師との関係などについても記しています。

近藤慶一翁自伝



文書館立研究会発行

* 橋本正之文庫225『近藤慶一翁自伝』は県立山口図書館等にもあります。

* 県内の寺子屋のリストは、田村哲夫『山口県小学校の系譜―地区別寺子屋の発展―』（文書館図書372）が便利です。県立山口図書館等にもあります。